なぜ、若手社員が亡くなったことを知らされなかったのか！

8 月 20 日（金）に若手社員が亡くなりました。同じ台検という職場で一緒に働いたものとして、本当に残念でしょうがありません。

8 月 23 日（月）に臨時総点呼が行われましたが、その中で所長は彼の通夜、葬儀について「台検車両所より多くの社員が参列していただきありがとう」と社員にお礼を言いました。所長が彼の通夜、葬儀への参列に対してお礼を言うのは良いけれど、しかしすべての社員が彼が亡くなったことを知っていた訳ではありません。会社は、彼が亡くなったことを一部の社員にしか伝えず 23 日に出勤してきて、初めて知ったという社員も多くいました。

訃報を知りながら隠蔽する会社管理者

20 日（金）の終業点後に「彼は遅刻ではないのか」という社員の問いかけに、管理者は「詳しいことは言えないけれど、遅刻ではありません」と答えました。つまり、20 日の終業点呼の時点で彼が亡くなっているということを知りながら、あえて伝えなかったということです。もし、台検車両所の管理者に普通の人を思いやる気持ちがあるなら、たとえその時点で通夜や葬儀の日程が分からなくても、20 日の終業点呼で彼が亡くなったことの一報を全社員に知らせ「詳細はあとで問い合わせてくれたら対応する」というのが、世間一般の常識ではないでしょうか？

このような異常なまでの会社の対応をみると、よほど彼の死因が会社にとって都合の悪いことであったといえます。

臨時総点呼の不可解な「安全綱領の唱和」！

ところで、所長は 8 月 23 日の臨時総点呼をなんと「安全綱領の唱和」で締めくくりました。亡くなった彼に対して黙祷を捧げ、在りし日の故人を偲んでの総点呼と思われますが、労災防止の「安全綱領の唱和」で締めくくるのは理解に苦しむばかりか、故人を偲ぶ場で、企業の意思を社員に植え付ける場として活用するという非人道的な考えであり、そこには人としての温もりも存在していません。そのセンスに人間性のかけらさえも感じることは出来ません。

私たちが今やらなければならないことは、人間としての温かさを感じれる職場、お互い社員が信頼し、助け合い生き生きと働ける職場を作ることではないでしょうか！彼もそのことを祈っているのではないでしょうか！。

２０１０年９月６日

ＪＲ東海労大阪台車検査車両所分会